

近代英語協会第 34 回大会

—— シンポジウム・研究発表・講演 ——

日時：2017年6月24日（土）

会場：青山学院大学総研ビル 12F 大会議室

東京都渋谷区渋谷 4-4-25

近代英語協会事務局分室

〒722-8506 広島県尾道市久山田町 1600-2

尾道市立大学芸術文化学部 平山研究室内

メールアドレス：hirayama@onomichi-u.ac.jp

協会ホームページ <http://www.modernenglish.jp/index.html>

（電話：0848-22-8311（代表） 会費振込口座 00810-9-5821）

「英語音変化研究の課題と展望」

司会：服部 義弘 (大阪学院大学教授)
講師：小倉 美恵子 (鶴見大学名誉教授)
講師：岡崎 正男 (茨城大学教授)
講師：堀田 隆一 (慶應義塾大学教授)

シンポジウム趣意書

大阪学院大学教授 服部 義弘

わが国における英語音韻史・音変化研究においては、学問の進展に寄与しうる、堅実で優れた論考が積み重ねられてきているが、統語変化や意味変化の研究の華々しさに比べると、いくぶん活発さに欠けるきらいがある。これは、欧米に比べ、わが国の歴史音韻論研究者人口が少ないことが主な理由の1つと考えられる。音変化・音韻史の研究者の増大につながるための一助となればとの願いも込めて、本シンポジウムを企画した。近年の音変化研究では、伝統的な文献学的研究をはじめとして、各種音韻理論からの具体的モデルの提唱、歴史社会言語学の成果などの、いわゆる外面史の影響を射程に入れた考察、そして、音声の産出・知覚過程の詳細が音変化に影響を及ぼし得ると主張する音声学の立場からの新事実の発掘など、さまざまな視点に立った研究が盛んに行われるようになった。

このような状況を踏まえ、今年のシンポジウムでは、3人の講師に、それぞれ異なる視点から音変化の問題を論じていただく。小倉講師には従来、対立的に捉えられることの多かった語彙拡散(Lexical Diffusion)のモデルと青年文法学派の考え方を統合した新しいモデルをご提示いただく。岡崎講師は主として英詩のデータに基づき、近代英語から現代英語に至る強勢・リズム規則の変遷を中心とするプロソディーの史的变化について、記述と理論の両面にわたる考察を行う。堀田講師は従来、本格的・体系的な考察がなされてこなかった音声と書記法との相互関係に焦点を当て、中英語から近代英語にかけての音変化に関する新たな提案を行う。

各講師の三者三様の立場からの考察を通じて、音変化研究に新たな知見がもたらされることを期待したい。

「音韻変化における Lexical Diffusion と Neogrammarian Regularity」

鶴見大学名誉教授 小倉 美恵子

言語変化は基本的には人から人への時間的、空間的な社会的拡散である。Lexical Diffusion では語から語への拡散と人から人への拡散という 2 面的な拡散を考える。語拡散が人拡散より遅いと変化は語の間に多く現れ、語拡散が人拡散より速いと変化は人の間に多く現れる。語拡散が非常に速く行なわれるのがいわゆる Neogrammarian Regularity である。本発表では Labov が規則的音変化と考える変化を批判的に考察し、Lexical Diffusion と Neogrammarian Regularity を統合したモデルを提唱する。EModE、現在進行中の母音変化に基づき、語拡散と人拡散の相対的割合によりすべての変化を捉えることができることを主張する。また規則的変化は同時に起こったのではなく、速度の速い拡散であり、語拡散の反映としての異なった年齢の話者の間の拡散として捕らえることができることを実証する。その中で、Lexical Diffusion における S-curve をたどる変化とその雪だるま効果、語の頻度、変化の割合などについて論ずる。

「句レベルの「強勢移動」—通時的考察—」

茨城大学教授 岡崎 正 男

名詞句内で名詞に先行する形容詞要素の主強勢の位置が「移動する」現象 (thirteen mén など) は、初期近代英語期から存在することが指摘されてきたが、史的变化の詳細は未だ不明な点が多いと思われる。それゆえ、本発表では、初期近代英語期からの句レベルの「強勢移動」の史的变化をたどり、その詳細を明らかにすることを目的とする。

具体的には、名詞の前位置に弱強の強勢型の形容詞要素がある場合の「強勢移動」の分布に対象を絞り、Donne, Milton, Shakespeare, Shelley, Tennyson, Keats, Dickinson, Emerson, Yeats などの詩のテキストの韻律分析をもとに「強勢移動」の事実を提示する。記述面では、初期近代英語期で現代英語と比べて「強勢移動」に課される制約がゆるやかだったことを指摘し、理論面では、近代英語期から現代英語に至る音韻文法の変化を提示したい。

「英語史における音・書記の相互作用—中英語から近代英語にかけての事例から—」

慶應義塾大学教授 堀田 隆一

英語史の各時代に生じてきた数々の音変化は、書記にどのように反映され、あるいは反映されてこなかったのか。逆に、書記上の変化が音変化に反映されることはあったのか、あったとすればいかなる形で反映されたのか。また、音と書記の互いの反映の仕方は、時代によっていかに異なり、どのような要因に依存していたのか。英語史研究において、音変化の同定そのものが、多くの場合、綴字上の証拠に基づいてなされてきたことを考えると、音と書記の関係を巡る問題は、方法論上きわめて基本的かつ重要な意義をもつものと思われるが、本格的な考察はあまりなされてこなかった。本発表では、ケース・スタディとして、“magic <e>” や語源的綴字を含む、主として中英語期から近代英語期にかけて生じた諸変化を取り上げ、事例分析を通じて、英語史における音・書記間の動的な相互作用に注目し、とりわけ書記の観点に立った上でその関係の類型化を目指す。

■ 研究発表 第一部 13:30—14:50

司会 広島修道大学教授 水野和穂

1. 「18世紀戯曲における thou と you」

獨協大学非常勤講師 野々宮 鮎美

本発表では、18世紀イギリスの戯曲における二人称単数代名詞 thou と you の用法について考察する。喜劇での thou の使用は複数の研究があるが (Walker 2007, Kerridge 2014 など)、悲劇における用法は「文体が不自然である」などの理由で注目を浴びておらず、Mitchell (1971) 以降新しい研究が出ていない。喜劇、悲劇各 10 本における thou と you の使用頻度を調べてみたところ、喜劇では thou の割合が非常に低い (10%前後) 一方で、悲劇では thou の割合が非常に高く、70%を超えるものもあった。この割合の差は、両ジャンルの文体の差や、thou の果たす役割の違いによるものではないかと考察する。

2. 「John Donne と Lancelot Andrewes の説教文における言語使用の変遷—写本から印刷本へ—」

グラスゴー大学大学院生 矢 富 弘

近代英語の研究は CEECs のような大規模コーパスの開発、利用によって急速な進展を遂げた。一方で文献学的な視点は見過ごされがちである。近代英語の史的研究は、多くの場合印刷本を Linguistic evidence として用いてきたが、印刷本として成立するまでに、編集者や印刷者などによる介入があったことは明白である。Corpus of Sermons in Early Modern England (Yadomi 2016) のような大規模コーパスを用いる際にこの視点を忘れてはならない。

本発表では、17 世紀英国を代表する説教師である John Donne と Lancelot Andrewes によって書かれたとされる説教文の、写本と印刷本における言語を比較し、両者に顕著な差異が存在することを指摘した上で、Book production の過程が印刷本で観察される言語にどのような影響を与えうるか、三人称単数語尾 *-th/-s* 及び、肯定文・否定文における助動詞 *do* の使用を通して議論する。

■ 研究発表 第二部 15:10—16:30

司 会 島根大学教授 縄 田 裕 幸

1. 「後期近代英語期における動詞移動について—Haeberli and Ihsane (2016) の議論を中心に—」

甲南大学大学院生 乾 拓 也

英語における動詞移動の歴史的変遷を分析した Haeberli and Ihsane (2016) は、文副詞を超えた定形動詞移動は約 1500 年頃に、否定語を超えた移動は約 1700 年頃に消失したと主張する。このような動詞移動の段階的な消失は、移動の生じる構造と生じない構造の選択の際に、言語学習者がより簡潔な派生である後者を選択することで生じる。

本発表では、主に後期近代英語期 (1700-1900) における動詞移動の諸相を分析する。さらに現代英語であっても動詞移動が見られることを確認し、これらの移動の生じる構造は初期近代英語期に見られたものの「残滓」であり、形態統語的要因のみによって生じるのではなく、その他の要因 (音韻的、語用論的、社会言語学的要因) によって生じる可能性があることを主張する。

2. 「大母音推移とその直前の閉音節化」

聖徳大学教授 藤原保明

中英語の語末の<e>(=/ə/)は語の範疇や起源を問わず、15世紀末までにほぼ脱落した(中英語 *gesse* > *guess*, 中英語 *grene* > *green*, 中英語 *sonne* > *sun*)。それゆえ、近代英語期以降、語末の/ə/に対応する母音字は<e>ではなく<a>であり、しかも<a>(=/ə/)で終わる語は、語末の<e>(=/ə/)の脱落以降に英語に借用された語に限られる(*algebra*, *camera*, *mora*)。このように、語末の<e>(=/ə/)の脱落は、それ以前に<e>(=/ə/)で終わっていた在来語の語幹をすべて子音で閉ざすことになる大規模な音変化であった。それでは、このような語末の閉音節化はその直後から始まる近代英語期の「大母音推移」とどのような関わりがあるのだろうか。冠詞の *a*(=/ə/)と *the* の<e>(=/ə/)は例外なのか。閉音節化は語末以外には生じないのか。今回の発表ではこれらの問題点について考察したい。

■ 講演 17:00—18:00

司会 明海大学講師 野村忠央

「構文的イディオムの発達—put と set の競合関係において—」

青山学院大学名誉教授 秋元実治

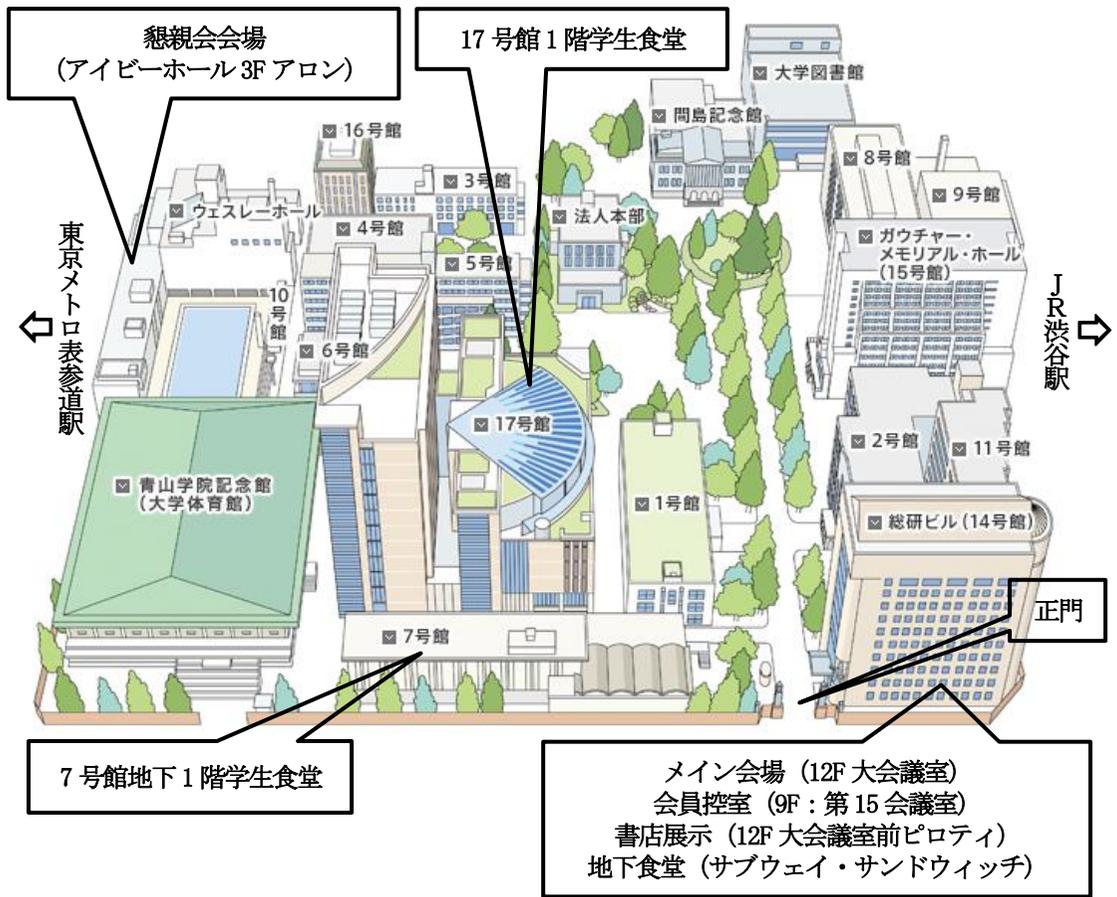
Culicover and Jackendoff (2005)や Goldberg and Casenhiser (2006)が提唱している構文的イディオム(*constructional idiom*)の史的発達を ‘*put/set + preposition+ NP*’ パターンを例に、‘*put*’ と ‘*set*’ の競合関係の観点から考察していく。

構文的イディオムは従来考えられているような全く固定したイディオムでなく、バリエーションがあるなど、柔軟性を持ったイディオムである。

古英語では ‘*put*’ は多くなかったが、徐々に頻度を増し、中英語期以降、‘*set*’ と拮抗するようになった。初期近代英語期以降、‘*set*’ は ‘*put*’ に追い抜かれ、頻度が減少し、その用法、機能を狭めていった。その過程において、‘*put*’ と ‘*set*’ はいわば分業(*division of labour*)の形で、そのイディオム的性格を発展させていった。

本発表では、主に、*Helsinki Corpus* 及び *Archer Corpus* を使って、‘*put*’ と ‘*set*’ のイディオム化(*idiomaticization*)の過程の解明を試みる。

青山キャンパスマップ



総研ビル (14号館) 平面図

